

敗北の構造

——陳独秀と統一戦線——

横山宏章

1. はじめに

軍閥割拠の1920年代。階級対立がそのまま軍事対立となっている中国で、軍事的な反革命から、生まれたばかりの幼い中国共産党を育てていくためには、諸軍事勢力の均衡を操作しながら、自己の勢力を強めていくことが最初の任務であった。中国共産党初代総書記の陳独秀はこのような考えのもとに、国共合作を勢力均衡と組織拡大のための一時的な戦術と考えた。しかし、コミンテルンや瞿秋白は、国共合作をそのまま労農民主独裁へ導びく戦略レベルで考えた。内部的にはこの対立、外部的には国民党との抗争をはらみながら、共産党は中国国民革命に敗北した。この敗北の真っ只中にいた陳独秀を通し、革命の現状認識と統一戦線のあり方をさぐる。

2. 「2段階革命論」からの脱皮

陳独秀の中国革命論といえば、いわゆる「2段階革命論」によって代表され⁽¹⁾ている。それは、中国ではブルジョアジーとプロレタリアートはまだ分化しておらず、共同して立ちあがらなければならないという階級未分化＝階級未対立論に立脚、そこから革命を指導するのは国民党＝国民政党であることが導びき出される。そして、革命の最初の形態はまず国民革命であって、ブルジョアジーの勝利のあとに、プロレタリア革命が始まるという論理であった。⁽²⁾

この陳独秀の理論の原型は、コミンテルン・スターリンによって唱えられた後進国中国における労働者弱体論と、それを補填する国民党＝諸階級政党論、⁽³⁾ならびに歴史発展はブルジョア革命を必ず通過しなければならないという決定

論的な歴史の発展段階説に負うところが大きいことは明白である。⁽⁴⁾

こうした理論の結果として、国共合作を最上の策とし、必然的に中国国民革命における労資協調主義と、ブルジョアジーのヘゲモニー⁽⁵⁾を認めることとなった。⁽⁶⁾

ところが国共合作によって、政治情勢が急激な高揚をみせるにともない、政治的対立としての、国民党と共産党とのヘゲモニー争いが尖鋭化してきた。こうして陳独秀は1924年末になると、モスクワ帰りの彭述之の影響も受けて、理論的立て直しを図った。それまでの労資協調主義を放棄、再び労資対立へ転換した。そして最初の作業は、中国国民革命におけるヘゲモニーの所在を明確にすることであった。

まず「プロレタリアートだけが最も徹底した革命階級であり……国民革命においても闘いの指導者にならなければならない」⁽⁷⁾。そしてヘゲモニーを握るべきプロレタリアートの力量についても、軍閥やブルジョアジーに匹敵する勢力と認め、「最も革命性、集中力、闘争力に富み、妥協を知らない唯一の革命者である」⁽⁸⁾と解釈し直した。

同時にブルジョアジーの反革命性を強調しはじめた。とくに5・30運動後は、はっきりと「植民地・半植民地のブルジョアジーも革命はしない」⁽⁹⁾と宣言した。それまで抱いていた、幼稚な中国のブルジョアジーは革命的要求を持っているであろうという幻想を捨て、「彼らが当然もっている革命的要求は、彼らの階級的反動性によって、いともたやすく打ち消されてしまった」⁽¹⁰⁾と悟るにいたった。

こうして陳独秀はブルジョアジーの革命性を高く評価し、プロレタリアートの力量を低く評価して国共合作を正当化していた従来の見解をガラリと変え、ブルジョアジーの反革命を強調、プロレタリアートの力量を高く評価するようになった。

ブルジョアジーの反革命的脅威のもとで国民革命を推進するとすれば、おのずと革命の未来は階級の力関係で決まるであろうし、その関係のあり方によって革命の内容はより複雑にならざるをえない。陳独秀の同調者・彭述之は「中

国労働者階級の使命は決して国民革命だけに限られているのではない。……一方で極力国民革命を徹底的に押し進めなければならないし、他方では将来のプロレタリア革命を準備しなければならない⁽¹¹⁾」という結論を出した。

こうした理論的变化にともない、陳独秀らは国民党内合作という国共合作のあり方⁽¹²⁾を批判していった。

ではこうした変化はどこから来たのか。当時すでに国民党の左右分極化が激しく進んでいた。そこで動搖的な国民党に参加する国共合作の限界を明らかにするとともに、ブルジョアジーの反革命性を強めていく国民党から、幼い共産党の成長を守ろうと考えた陳独秀の政治感覚から来るものであった。

その背景にあるものとして、広州商団事件と5・30が考えられる。広州商人階級が商団軍を率いて武装反革命に立ち上った広州商団事件に対し、群小軍閥の連合体であった孫文の広東軍政府は、商人層との関係が強い群小軍閥の利害関係におどられ、優柔不断な動搖をみせた。商団軍を「革命政府の獅子身中の虫⁽¹³⁾」として、商団軍鎮圧を求めた陳独秀の要請に対し、孫文はなかなか武力鎮圧に踏み切れなかった⁽¹⁴⁾。国民党の革命性に対する疑いはますます濃くなっていった。

また5・30によって、労働運動の実力が発揮され、同時にブルジョアジーの反動的立場が明らかとなった。共産党も正式にプロレタリアートのヘゲモニーとブルジョアジーの反革命という図式をつくりあげていったほどであった⁽¹⁵⁾。

3. 軍事独裁を警戒

ブルジョアジーの反革命が中国で展開されるとすれば、それはどのような形態をとるであろうか。中国のブルジョアジーは独自の政党を持ってはいなかったが、国民党の主要な勢力を構成していた。軍事対立がそのまま階級対立に反映していた情勢下で、軍事権力を基盤に成立していた国民党が反革命に走るとすれば、軍事的弾圧しかなかった。そこで軍隊を持たない共産党にとって、国民党の軍事独裁化は最も恐れるところであった。このため国共合作のもとにあっても、国民党の軍事行動に対する共産党の非難は、あらゆる政策以上に苛烈

であった。

陳独秀は最初から、国民党が大衆運動を軽視した軍事偏重で、軍閥間を往来しながら軍事的に権力を維持することに腐心している姿に憤りを感じていた。⁽¹⁶⁾ 彭述之も、国民党の軍事行動は地盤争いや昇官発財の精神から生まれたもので革命の観念はない、「現在の国民党の軍事行動は 大衆の武装ではなく、強盗の武装軍閥である⁽¹⁷⁾」と激しく批判した。

国民党の軍事行動に対する共産党の批判は、北伐に対する反対で頂点を極めた。蔡和森は雇われ軍閥による北伐よりも、広東の反革命集団の鎮圧が先決であるとした。⁽¹⁸⁾ なぜか。陳独秀は指摘する。国民党の「広州政府が持っている軍隊は……完全に利益だけで結合した雇われ軍隊であり、すこしも信頼できる革命軍隊ではない⁽¹⁹⁾」以上、革命的な軍事行動はできない。まず強大な革命政党を建設することが先であり、そのあとではじめて革命軍隊を持ち、革命政府を樹立することができる。そして現状では「政府の建立、軍事行動、北伐、西南団結⁽²⁰⁾といった以前の旧政策を放棄し」まず国民党が大衆の中に入るものが課題であると。彭述之は大衆への宣伝と訓練によって党と軍隊を革命化したあと、はじめて蜂起することができると訴えた。⁽²¹⁾ 概して共産党にとって、国民党の軍隊は軍閥とかわりないものであった。国民党の進歩的側面を認め、革命軍への転換を期待しつつも、軍閥軍という性格からくる投機的な反革命的傾向に警戒することを決して忘れなかった。

では陳独秀らが執拗にまでも国民党の軍事第一主義及び北伐を非難したのはなぜか。国民党と共産党の決定的な力量の差は、自己の軍事力を持っていることと、持っていないことの違いであった。それゆえ、陳独秀が最も恐れていたのは、国民党のブルジョアジーが自らの階級的自覚に目覚め、国民党の持つ軍事力を背景に軍事独裁へ向い、軍閥や封建勢力と手を握って反革命に走ることであった。国民党の軍事行動に対する批判は、このまま軍事行動を放任しておけば国民党は軍事独裁へ向い、若いプロレタリアートと共産党はその軍事力の前に崩壊するのではないかという危機感があったからである。

また北伐に反対したのは、国民革命軍が軍閥の軍事力に敗北することを恐れ

たからであろうか。むしろ逆であった。国民革命軍が現状のまま軍事的に勝利することを恐れたのであろう。民衆の勢力が充実されていないままに、軍事的勝利を重ねれば、勝利した軍人がそのまま軍事政権をしき、未組織の大衆はそれを防止できなくなる。そうすれば軍事政権の鋒先は軍閥に続いて共産党に向けられることは明らかである。党による軍人のコントロールが確立されていない所では、軍事的勝利は革命の勝利ではなく、軍部の勝利でしかない。陳独秀はいう。「現在、われわれが直面している事実は、民衆運動の発展の速度が軍事の発展よりはるかに遅れているということであり、こうした状態がもし今後とも継続すれば、極めて容易に軍事勢力が右翼化し、さらに民衆から離れて新たな軍事独裁政治を形成することになりかねない⁽²²⁾」。「兵権を手中に握っているものが、もし民衆あるいは党のいかなる制裁を受けることがないとすれば、すべて軍閥と化するか、あるいは軍事独裁政治を形成する可能性がある⁽²³⁾」と。

陳独秀の戦術は、ブルジョアジーの軍事的反革命を内抱した諸軍事勢力の中で、一種の均衡をとりながら、幼稚な共産党を育てていこうとするものであった。この考えは国共合作に対する見方にも貫徹していた。陳独秀にとって、国民党の軍事独裁が進むのであれば、国共合作を支えるバランスが崩れ、当然国共合作とは違った独自の闘争へ踏み出す準備をおこたることはできなかったのである。

4. 国共合作は戦術か戦略か

では陳独秀にとって、統一戦線の中国版である国共合作は何であったか。結論的にいえば、諸軍事勢力の対立と均衡の中にあって、軍隊のない共産党が軍事的に崩壊させられることを防ぎ、革命党として生き抜くための、操作としての一時的な戦術であった。

もともとレーニンの統一戦線は次のような構図を持っていた。⁽²⁴⁾労働者階級を即時完全に解放できない以上、ブルジョアの自由と進歩を求める民主主義革命を徹底的に遂行、この革命を通して労農民主独裁を実現、社会主義への道を開くことであった。こうしたブルジョア革命を徹底することがブルジョアジーの

基盤そのものを弱めるはずであった。しかしブルジョア革命徹底化の過程で、ブルジョアジーの抵抗＝反革命は強まらないだろうか。この疑問に対し、レーニンは極めて楽観的に答えた。プロレタリアートが農民大衆を味方に引きつけ、民主主義的変革を最後まで遂行すれば「ブルジョアジーの動揺を克服する」⁽²⁵⁾ことができる、と。

国共合作はブルジョアの民主主義を目指すものであったから、レーニンの見解によれば国共合作のもとで中国にも労農民主独裁を樹立することであった。しかし前述のごとく軍事的対峙による革命と反革命の谷間にいる共産党が国共合作内で労農民主独裁への権力闘争を開始すれば、ブルジョアジーが軍事弾圧へ乗り出すことは明らかであった。中国の情勢はブルジョアジーの反動を労農運動の高まりによって克服できるというレーニンの楽観論を許さなかった。

陳独秀は国共合作内で共産党が勢力を伸ばせば、平和裡に国民革命のヘゲモニーを奪えるというレーニンの楽観を持ちえなかったし、むしろ逆に、対峙の狭間にあって共産党の存続条件を見い出すのに必死であった。陳独秀にとって国共合作は、まだ単独で中国革命を指導できない共産党が、当分のあいだ中国の諸階級の力関係の中で、最も効果的に実力をたくわえる場であった。それはブルジョアジーが革命的である限り、その他の反革命集団から幼稚な中国プロレタリアートと共産党を守る防禦壁であり、革命をとりまく条件と階級関係の変化により、ブルジョアジーの革命性が失われれば、国共合作はその任務を終えるものであった。であるから、陳独秀の国共合作論は組織防衛と拡大のための過渡期の一時的な戦術であり、レーニンの労農民主独裁へつなげる権力奪取の組織ではなかった。

コミンテルン及び瞿秋白はレーニンに近かった。コミンテルンが中国国民革命の形態を定式化した「12月決議」⁽²⁶⁾によれば、国共合作内でプロレタリアートが運動のヘゲモニーを奪い、国民党を人民政党へ発展させ、民主独裁を進めることが共産党の任務とされた。つまり国民党及び広東政府の発展と左傾化が、そのまま労農民主独裁へ向うものと期待されたのであった。

瞿秋白もこの見解であった。国民革命は土地革命を中心に「そのまま社会主

義へ進み、『民主主義から社会主義へ』発展していく⁽²⁷⁾。そのためには「単に民族ブルジョアジーの指導権を覆すのではなく、我々の戦術はその指導権を奪い⁽²⁸⁾とることである」。そのためには国民党に労働者、農民、兵士などを結集させ、国民党左派の運動を組織し、古い国民党を改造し、政府形式の革命の中心を形成する。そして「だんだんと民族ブルジョアジーの指導権を剥奪し、民族ブルジョアジーの軍事独裁を消滅させ、平民大衆の独裁にとってかえていく⁽²⁹⁾」。「この過程でプロレタリアートは革命の指導権を奪い⁽³⁰⁾とることが可能となり……労働大衆の革命的民主独裁を樹立する」。

この瞿秋白の理論は共産党が国民党の実質的な指導者になれるという見通しによって成り立ち、国共合作は「軒を借りて母屋をとる」類いの理論であった。そこには母屋は奪えるという楽観論が横たわっていたことは間違いない。反革命の脅威を的確に見抜いていた陳独秀には、軍事独裁化を進める国民党の力関係からして、こうした楽観論が実現するはずはない、と考えられていたが、瞿秋白やコミンテルンには、こうしたリアリティを持ちえなかった。

それはともあれ、瞿秋白らは国民党との統一戦線を単に一時的な戦術にとどめることなく、国共合作によって統一戦線政府を樹立、そして労農民主独裁から社会主義政権へ進む戦略レベルで国共合作を語った。軍事対立の中にあっても、国共合作は単に一時的な戦術にすぎないという陳独秀とは決定的な違いをもっていた。この違いが国民革命における諸現象の対処、とくに蒋介石の扱い方に対する陳独秀とコミンテルンとの対立を生み、その対立が国民革命の敗北を導びいていった。

5. 蒋介石に譲歩

1926年3月、蒋介石は広州事変（3・20クーデター）をおこし、共産党の活動封じ込めを開始した。のち蒋介石の軍事ファシストによる陰謀といわれた⁽³¹⁾が、発生当時はそのように断定できるほど単純な状況ではなかった。上海の共産党中央委員会と国民党の膝元広州の共産党広東委員会との対立が表面化した⁽³²⁾。

上海の中央委員会は広州事変の処理として、広東の葉挺部隊や労働者糾察隊を拡充し、農民を武装して、蔣介石を孤立化させることにした。そして同時に⁽³³⁾国共合作を国民党内合作から党外合作へ変更するように求めた。広州にいたコミンテルン派遣のボロディンがこれに反対した。共産党の国民党脱退については、盟友の国民党左派が反対している以上認めることはできない。また国民党右派から左派を守るためには、蔣介石の革命的独裁が必要であり、現時点では⁽³⁴⁾譲歩しなければならないということであった。

蔣介石のクーデターはブルジョアジーの反革命の開始とみた上海は、銃口を蔣介石に向けると訴え、国共合作による国民党左傾化工作に全力を注いでいた広州は、蔣介石の軍事支配体制に協力しろということであった。この折衷は不可能であった。結果は陳独秀がボロディン＝コミンテルンの方針に屈服することで終った。蔣介石の反革命の脅威を感じつつ、蔣介石との提携を進めるといふ、建前と本根の分裂の中に押し込められた共産党は、ついに広州事変の批判を曖昧なものにし、機関誌もそれに対する論評を極力避けた。

こうした宥和策に力を得た蔣介石はさらに追い打ちをかけた。「党務整理案」⁽³⁵⁾などを成立させ、国民党に対する共産党員の絶対服従を認めさせた。こうして広州事変の成果を法的に明文化させることに成功した。

共産党の譲歩戦術は国共合作の維持を最上の策としたコミンテルンによって導かれたものであった。しかし、国民党の攻撃から身を守るだけの消極戦術は、共産党員の情熱を歪なものにした。コミンテルン寄りの張太雷ですら、国民党右派路線に近い結末に悲観した。共産党員は国民党の寄生虫ではない。共産党員が国民党から退却すれば、困るのは国民党の方であると、自らをなぐさめるだけであった。⁽³⁶⁾

張太雷以上に陳独秀の心境は複雑であった。陳独秀はすでにブルジョアジーの反革命を見通し、西山会議派の右派だけではなく、中間派までが妥協傾向にあることを指摘し、⁽³⁷⁾理論的に広州事変を予想していた。その危惧が現実のものとなっても、国共合作の変更と蔣介石との対立を禁じられた陳独秀はその脅威を阻止する有効な手段を講じることができなかった。蔣介石の軍事独裁体制づ

くりが進められていくのを目の前にしながら、陳独秀は一種の無力感を味わったに違いない。この一時期、広東の情勢は語らず、もっぱら北京情勢を中心とする北方問題を語るだけであった。

こうして一種の折衷主義が生まれた。蔣介石の反動化が明白となりつつも、それとの断絶を実行することができない以上、蔣介石を中間派に仕立て、「われわれは左派（汪精衛、甘乃光）と連合するとともに、中間派（戴季陶、蔣介石）に迫って反動派（馮自由、孫科）に攻撃を加えさせ、同時にまた中間派の発展を防ぎ、彼らが右を離れて左につくよう迫ることである⁽³⁸⁾」と。これは国共合作に共産党がとどまりながら、国民党左派と連合を強めて蔣介石の野望を食い止めようという意図が込められていた。しかし左派との連合が蔣介石の軍事支配を上回るという保証はどこにもなかった。

独自の革命を歩みはじめた蔣介石に権力が集中していく中で、その集中を認めつつも、無条件に国共合作を推進したボロディンの方針は、勤労大衆を無防備にさらすことであった。その恐れがあったからこそ、陳独秀は国民党内の合作からの撤退と、独立な軍事力の組織化を要求していったのであった。ところがコミンテルンは国共合作を進めながら、その内部における権力の逆転と移行を目指していたため、なによりもまして国共合作を必要としていた。コミンテルンによれば、ブルジョアジーはいずれ統一戦線内でプロレタリアートに乗り越えられる運命にあるものと位置づけられていたため、広州事変によるブルジョアジーのヘゲモニー争奪のもつ重大性を理解できなかった。そうして大衆をブルジョアジーの反革命から身を守る手段を構じえなかった。

6. 蔣介石の反革命

1926年7月、北伐戦争が始まった。広東を出た国民革命軍は各所で軍閥軍を破り、またたく間に揚子江まで勢力を伸ばした。しかし陳独秀はその勝利を素直には喜ばなかった。北伐軍の軍事的勝利のテンポがそれを支えるべき民衆運動の発展スピードよりはるかに早く、そのギャップが軍事独裁を生むであろうと心配した⁽³⁹⁾。事実、蔣介石は南昌に総司令部を設置、武漢に移った国民党中央

委員会と反目、軍事的独裁の傾向を強めていった。陳独秀の憂畏は現実のものに近付いた。

この情勢を反映して、陳独秀はついに北伐戦争下における反蒋介石キャンペーンを開始した。まず蒋介石に対するシビリアンコントロールの必要性を訴え⁽⁴⁰⁾、蒋介石の独自な軍事行動を批判した。そして現実には革命軍と民衆との亀裂⁽⁴¹⁾や、民団駐防軍による農民協会の破壊を摘発、軍事クーデターの危険を訴えた。蒋介石も逆に国民党の制裁を主張するに至り、陳独秀はそれを南北妥協に走る証拠で、右派の西山会議派が唱えている見解と変らないものであると非難し⁽⁴²⁾た。

彭述之も陳独秀に呼応して、革命戦線分裂の危険性を指摘した。武漢政府の樹立は北伐の成果として歓喜をもって迎えられたが、彭述之は冷たい反応を示した。北伐軍の勝利とは裏腹に、連合戦線内には危機が広がっている、と。その原因として、帝国主義の脅威、誘利、挑発と、革命戦線内部の妥協的非革命的分子の反動化をあげた。そして反革命が他ならぬ国民党内部からおこりつつあることを憂慮した。「労農階級の勢力が発展し、客観的にブルジョアジーの支配力をしのぎ、ブルジョアジーがもはや意のままに指導できないことを認めるにいたった。そこで彼(ブルジョアジー)の利益と接近している買弁、官僚、地主を援助して引き入れざるをえなくなり、……革命の名を利用して革命を破壊⁽⁴⁴⁾」するようになった、と。もちろん武漢政府にも不満であった。「現在の国民政府は看板にすぎず、実際は完全な軍事独裁である⁽⁴⁵⁾」と、国民政府の根本的な改造を要求した。

陳独秀、彭述之らは蒋介石を代表とするブルジョアジーの切迫した反革命の危険性を訴えた。この訴えが政治的な効果をあげるには、それが戦術面にまで反映する必要があった。しかし武漢政府の充実に力を注ぎ、同政府を通した労農民主独裁の実現を志向していたコミンテルンにとって、当面は戦術の変更は考えられなかった。こうして陳独秀は共産党の最高幹部の地位にいながらも、自らの理論と主張を実行できないという精神的閉塞状況におかれてしまった。

悲劇はまもなくやってきた。1927年4月12日、労働者蜂起の成功した上海で

蔣介石は反共クーデターを断行、共産党員を虐殺した。そして国民党左派とも手を切り、南京に独自の政権を打ちたてた。そして激しい共産党弾圧が始まった。昨日の友はまさしく今日の敵となった。

ところが1年前の「3・20クーデター」が「晴天の霹靂」⁽⁴⁶⁾であったのに比べ、この「4・12クーデター」はさほどの驚きをもって迎えられはしなかった。コミンテルンは蔣介石が帝国主義の買収によって革命を裏切り、中国ブルジョアジーが闘争より離脱したことを宣言した。それは予想されていたブルジョアジーの革命離脱が現実のものになったにすぎないという見解であった。

陳独秀や彭述之の警告にもかかわらず、蔣介石の反革命を防ぐことができなかったという衝撃は、革命における必然的なブルジョアジーの離脱論によって消された。こうした反革命に対するコミンテルンの過小評価は、国民革命の本流は蔣介石の樹立した南京政府にあるのではなく、国民党左派の武漢政府に存在するという認識、ならびに依然として武漢政府の改善による労農民主独裁が可能であるという認識によって生じたものであろう。

このため「封建的ブルジョア的分子の裏切りののち、国民党はプロレタリアート、農民および小ブルジョアジーの革命的民主ブロックに転化した」⁽⁴⁸⁾こととなり、革命の土地綱領と民主的綱領とに反対してきた封建＝ブルジョア分子が国民革命から離脱したことによって、革命的民主的諸勢力の自由な発展への障害がとりのぞかれ、「部分的敗北と蔣介石一派の反革命にもかかわらず、革命はより高次の段階に移った」⁽⁴⁹⁾という奇妙な結論が生まれた。そこには反革命＝革命の前進、とみる無理があった。

それは次のような楽観的な展望によって裏打ちされていたのであろう。ブルジョアジーのいなくなった新たな3階級ブロック、つまり武漢政府では、共産党が国民党と権力を分有でき、国民政府および地方の諸政府へ参加していくことができる。そして共産党の強力な活動を通して、種々の国家機関および党機関に対する大衆の影響力を実現していくことができる、と。

7. 陳独秀のジレンマ

北伐軍の勝利、上海蜂起、4・12クーデター、南京と武漢の分裂といった一連の出来事は、中国国民革命という壮大なドラマが最もその頂点に登り詰めた時におこっただけに、最も激しい革命と反革命の闘いを示すものであった。そこには中国革命が抱えていたすべての問題が投げ込まれていた。たとえば、流氓的軍隊の中にどのようにして革命的精神と規律を持ち込むべきか、統一戦線内部の妥協分子の動揺をどのように打ち破っていくのか、統一戦線のヘゲモニーをどのように獲得していくのか、労働者の蜂起によって奪取した権力はどのようにして発展させるべきなのか、革命的根拠地を反革命からどのようにして守っていくのか——こうした本質的な問題が横たわっていた。

党創立以来5、6年というわずかな革命運動の経験しかない共産党員にとって、こうした問題のすべてに答えられる強靱な思想と的確な判断を持ちあわせることは至難の業であった。陳独秀はとうていその任を全うできるほどの力量はなかったし、いわんや国民革命の中で、誰れ一人としてこの激しい革命の進展に、一貫した適切な戦術を駆使できたものはいなかった。

だが陳独秀は共産党の最高幹部である以上、みずからの理論と実践をもってそれに挑戦しなければならなかった。しかし、国民革命をとりまく政治諸力、とくに国民党とコミンテルンの圧力のもと、力およばずして、どれ一つとして解決することなく、その挑戦は敗北に終わった。

陳独秀を襲った最大の挫折感は次の点にあったであろう。武漢政府の育成を革命の中心にすえる戦略にとってみれば、蔣介石の共産党弾圧は統一戦線からブルジョアジーがころげ落ちたにすぎないが、陳独秀のようにブルジョアジーとのヘゲモニー争いを重視した立場からすれば、4・12の敗北ははかり知れない衝撃であった。

一つは当然ながら組織の敗北に対する衝撃。それ以上に大きかったのは、蔣介石の軍事的反革命を事前に予知しながら有効な対抗策をとることができず、多くの労働者がむざむざと血の海に投げ込まれていく姿を見ざるをえなかったという、指導としてのリーダーシップの喪失に対する衝撃。この衝撃は陳独秀

自らの力のなさに自虐の念を抱かせたに違いないし、また革命的情念をズバズバに切った。そして自らの理論が組織内で貫徹できないむなしさも感じたことであろう。陳独秀はこの挫折感から、4・12以降、急速に消極的な政策へ閉じ込められていった。

中国共産党五全大会は南京と武漢の分裂を総括し、土地革命の拡大を決議⁽⁵⁰⁾、武漢政府を中心に革命の深化をはかるコミンテルンコースを採用した。だが今度は土地革命を拡大することで、国民党左派の反革命の脅威を生んだ。唐生智を中心とする国民党左派の軍人将校は中農出身が多く、土地革命はそうした軍人の基盤を崩すものであったから。

土地革命に対する国民党の抵抗は早かった。1927年5月、武漢政府の軍隊である夏斗寅と許克祥があいついで叛旗をひるがえし、共産党弾圧へ乗り出した。許克祥が長沙で革命組織と共産党員を弾圧した馬日事変について、陳独秀は国民党に書簡をおくり、早急に湖南の反革命を討ち滅ぼすように要求した⁽⁵¹⁾。

しかし国民党左派はそれを反革命と認めることを拒否した。馬日事変の調査に当たった唐生智は、それをゆきすぎた労農運動に対する正当行為であると報告し⁽⁵²⁾た。国民党も共産党への返書で、共産党員の小児病的傾向（土地革命のゆきすぎ⁽⁵³⁾）を矯正するように要求した。これは国民党左派と共産党との連合も決裂が近付いている証拠であった。

この緊迫した情勢の中で陳独秀はたじろいだ。だんだん的確な自己判断の操作を喪失してきた。陳独秀には蒋介石の反共クーデター前後の苦い経験があった。一つは、国共合作のもとでは反革命を阻止できないという教訓。もう一つは、国共合作の放棄はコミンテルンが認めないという事実であった。この二つは矛盾していた。ここで陳独秀はためらいつつも決断を避けていった。一方では国民党左派との合作を放棄しようと考えながら、一方では合作を維持するために、農民運動の高まりを「ゆきすぎ」として押えようとした。こうしてだんだん矛盾した世界に押しやられていった。陳独秀はそうした世界に入ることが最良の方策であるとは考えてはいなかったであろうが、コミンテルンと国民党という巨大な組織の圧力に押しつぶされて、独自の道を歩めなくなっていた。

陳独秀はまず国民党の弾圧が強まってきて、すでに汪精衛も蔣介石の道を歩んでいるとみなし、コミンテルンに対し、国民党からの撤退を要求した。⁽⁵⁴⁾そしてやはり国共合作の維持をコミンテルンが望むものであれば、共産党は国民党に譲歩し、農民運動の「ゆきすぎ」を調整して土地没収の実行を緩和しなければならぬと、⁽⁵⁵⁾コミンテルンに電報を打った。

陳独秀はコミンテルンに対し、国民党に属すべきか、国民党から離脱すべきか——この二者択一の選択を要求したのであった。それは結論をコミンテルンの裁断にあずけるというリーダーシップの放棄を意味していたが、陳独秀はすでにコミンテルンへの挑戦、ならびに国民革命に課せられていた諸々の課題への挑戦を続けられるほど自由な立場にはいなかった。

陳独秀への回答としてコミンテルンは6項目の訓令を出した。⁽⁵⁶⁾それは国民党からの脱退を認めず、しかも同時に「ゆきすぎ」の調整と土地没収の緩和にも反対した。そして武漢政府と国民党を共産党の支配下に置くよう指令した。これはコミンテルンによる国民党工作からくる当然の帰結であった。コミンテルンは一貫して、国共合作下における国民党の左傾化を通して、共産党のヘゲモニーを確立し、かつそれを国民党から奪うことを目的としていたから。

この訓令が出るに至って陳独秀は完全に進退窮まった。共産党の指導者として独自の道を歩むことは完全に封じられた。と同時にこれは共産党自身の進退も窮まらせた。共産党にはこの訓令を実行できるほどの実力はもうなかったし、国民党左派はそれを許すほど無能ではなかった。駐華コミンテルン代表のロイがこの訓令電報を汪精衛に見せるという失態によって、国共合作は4年間の幕を閉じた。

1927年8月7日、陳独秀は中央委員会から追放された。理由は日和見主義を犯したということであった。⁽⁵⁷⁾

8. おわりに

国共合作を絶対視し、結果として国民党に対する宥和策＝投降主義をもたらしたコミンテルンに対し、最後まで自己の主張を通すことができず、反対意見

を述べるにとどまったのはなぜであろうか。原因の一つとして陳独秀の知識人の側面があげられるであろう。

知識人は社会変革へ先駆者として立ち上がらなければならないという使命感的情熱だけにとどまらず、自らの理論の卓越性についての自信、あるいは自らの行動と理論の社会的有効性への確信といったものが加味されて、政治世界への実践を踏み出すものと考えられる。ところが陳独秀が踏み出した政治世界は自らの理論の卓越性を可能ならしめる世界ではなかった。中国共産党全体がコミンテルンの理論的卓越性の下に押し込まれていたのであった。陳独秀の理論的卓越性がコミンテルンの理論的卓越性によって否定された時、陳独秀の知識人的情熱は抹殺され、自立への欲望を喪失、権威に服従することになっていった。

こうして陳独秀の悲劇がおこった。悲劇は自分の意志に反してコミンテルンの指導を守らなければならないことではなく、そうした権威に屈することで卑屈になり、自信を喪失して、その結果として革命的情熱を失うことである。この悲劇が典型的にあらわれたのが国民革命末期の陳独秀であった。

<註>

- (1) 陳哲夫「第一次国内革命戦争時期陳独秀の右傾機會主義剖析」『歴史研究』, 1960年第1・2期合刊, 科学出版社, 1960年。今井駿「陳独秀と国民革命」『中国国民革命の研究』, 青木書店, 1974年。
- (2) 陳独秀の「2段階革命論」は次の3論文によって完成された。「造国論」(1922. 9.20)『嚮導週報』第2期, 嚮導週報社, 以下『嚮導』と省略。「資産階級的革命与革命的資産階級」(1923. 4.25)『嚮導』第22期。「中国国民革命与社会各階級」(1923. 12)『前鋒』第2期, 平民書社。
- (3) コミンテルン「国民党に對する中国共産党の態度に關する決議」(1923. 1. 12)『中国共産党史資料集』1巻, 勁草書房, 以下『党資料』と省略。
- (4) メイスナーはこの決定論を「正統マルクス主義」と呼び、シュウォルツは「前レーニン主義的マルクス主義」と呼んだ。M. Meisner, *LI TA-CHAO AND THE ORIGINS OF CHINESE MARXISM*, Harvard University Press, 1967, p. 230. B. I. Schwartz, *CHINESE COMMUNISM AND THE RISE OF MAO*, Harvard University Press, 1952, p. 48.
- (5) 陳独秀「資産階級的革命与革命的資産階級」, 前掲。
- (6) 陳独秀「中国国民革命与社会各階級」, 前掲。

- (7) 陳独秀「二十七年以来国民運動中所得教訓」(1924.12.20)『新青年』第4期, 広州新青年社, 22頁。
- (8) 陳独秀「中国国民革命運動中工人的力量」(1925.2.7)『嚮導』第101期, 845頁。
- (9) 陳独秀「中国民族運動中之資産階級」(1925.11.21)『嚮導』第136期, 1239頁。
- (10) 同上。
- (11) 彭述之「誰是中国国民革命之領導者?」(1924.12.20)『新青年』第4期, 14頁。
- (12) 陳独秀「告全党同志書」(1929.12.10)『党資料』4卷。グルーニンによれば, 1924年7月にも陳独秀と毛沢東は国民党との決裂を準備したという。グルーニン「コミンテルンと中国における共產主義運動の生成」『コミンテルンと東方』, 協同産業出版部, 1971年。
- (13) 陳独秀「反革命的広東商団軍」(1924.8.20)『嚮導』第79期, 630頁。
- (14) 商団事件については『一九二四年広州商団事件』, 崇文書店, 1974年, を参照。
- (15) 「中国現時的政局与共產党的職任議決案」(1925.10)『党資料』2卷。
- (16) 陳独秀「北京政変与国民党」(1923.7.11)『嚮導』第31・32期合刊。
- (17) 彭述之「我們為什麼反对国民党之軍事行動」(1924.10.1)『嚮導』第85期, 695頁。
- (18) 蔡和森「北伐呢? 抵抗英国帝国主義及反革命呢?」(1924.9.17)『嚮導』第83期。
- (19) 陳独秀「国民党的一個根本問題」(1924.10.1)『嚮導』第85期, 687頁。
- (20) 同上, 688頁。
- (21) 彭述之「我們為什麼反对国民党之軍事行動」, 前掲。
- (22) 陳独秀「革命与武力」(1926.11.25)『嚮導』第179期, 1866頁。
- (23) 同上, 1867頁。
- (24) レーニン「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」(1905.7)『レーニン10卷選集』3卷, 大月書店, を参照。
- (25) 同上, 106頁。
- (26) コミンテルン執行委員会第7回拡大プレナム「中国情勢の問題に関する決議」(1926.2.16)『党資料』2卷。
- (27) 瞿秋白『中国革命中之争論問題』(1927.2), 中国共産党出版, 1927年, 84頁。
- (28) 同上, 126頁。
- (29) 同上, 126~127頁。
- (30) 同上, 151頁。
- (31) 胡華『中国新民主主義革命史』初稿修訂本, 人民出版社, 1953年, 75頁。
- (32) 姫田光義「中国ソビエトの研究序論」『国際問題研究』紀要第2号, 日本国際問題研究所, 1969年, を参照。
- (33) 彭述之「談歴史的文件作証」『明報月刊』総30期3卷6号, 明報月刊出版社,

1969年。陳独秀「告全党同志書」，前掲。

- (34) 彭述之「讓歷史的文件作証」，前掲。
- (35) 「党務整理案」「国共兩党協定弁法案」「連席會議組織案」（いずれも1926.5）『党資料』2巻。
- (36) 張太雷「致底要不要国民党？」（1926.6.10）『党資料』2巻。
- (37) 陳独秀「国民党新右派之反動傾向」（1925.12.20）『嚮導』第139期。
- (38) 「中央政治報告」（1926.7）『党資料』2巻，267頁。
- (39) 陳独秀「革命与武力」，前掲。
- (40) 同上。
- (41) 陳独秀「革命与民衆」（1927.1.31）『嚮導』第186期。
- (42) 陳独秀「評蔣介石三月七日之演講」（1927.3.18）『嚮導』第192期。
- (43) 彭述之「目前革命中的連合戰線問題」（1927.1.27）『嚮導』第185期。
- (44) 彭述之「目前革命右傾的危險」（1927.3.6）『嚮導』第190期，2040～2041頁。
- (45) 彭述之「国民政府遷移問題」（1927.2.13）『嚮導』第188期，2009頁。
- (46) 張国燾『我的回憶』第2冊，明報月刊出版社，1971年，498頁。
- (47) コミンテルン執行委員会「蔣介石の反革命クーデターに対するアピール」（1927.4.14）『党資料』3巻。
- (48) 「宣言」（1927.5）『党資料』3巻，37頁。
- (49) コミンテルン執行委員会第8回拡大ブレナム「中国問題に関する決議」（1927.5）『党資料』3巻，131頁。
- (50) 「宣言」，前掲。
- (51) 陳独秀「中国共産党致中国国民党書」（1927.6.4）『嚮導』第197期。
- (52) 唐生智「報告」（1927.6.26）『中国解放闘争史』，石崎書店，1967年。
- (53) 「中国国民党致中国共産党書」（1927.6.14）『中国解放闘争史』。
- (54) 陳独秀「告全党同志書」，前掲。
- (55) 陳独秀「コミンテルンへの電報」（1927.6.15）『党資料』3巻。
- (56) 「共産国際執委会緊急訓令」（1927.6）『党資料』3巻。
- (57) 「中国共産党中央執行委員会告全党員書」（1927.8.7）『党資料』3巻。